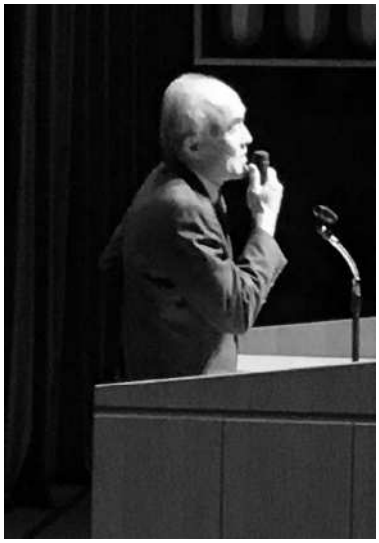
「第13回人権シネマの集い」を開催

２月９日（土）、サンシャインホールで「第13回人権シネマの集い」を開催しました。今年は林遣都（けんと）さん主演、市川悦子さんの映画遺作となる「しゃぼん玉」を上映しました。また上映に先立ち、罪を犯した人の更生保護活動をされている法務省主管淡路保護区副会長で淡路市保護司会会長の土井章光さんにお話をいただきました。映画に保護司は登場していませんが、罪を犯してしまったら終わりでなく、「保護観察」を受け、その人のやり直しを見守る人の存在はとても重要です。この映画でも罪を犯してしまった若者を見守る人々の存在が描かれています。原作は、直木賞作家・及南（のなみ）アサさんのベストセラー小説「しゃぼん玉」です。



親に見捨てられ、通り魔や強盗傷害を繰り返す無軌道な若者が、逃亡先で偶然出会った老婆や村の人々の愛情によって失くした感情を取り戻していく、血の繋がりを超えた絆と、人間の再生を描いた感動傑作です。

しゃぼん玉のようにフワフワと生きてきた若者は、自分自身を認めてくれる人々とふれあうことにより、帰るべき場所を見つけ、償うべき罪と向かい合う決断をします。

私たちの周囲で苦しんでいる人たちを支援するのは、暖かい心でふれあうことだと教えてくれる映画でした。

ひきこもる家族と共に生きていく

２月２日（土）、淡路市役所大会議室で、淡路市人権教育研究協議会津名・東浦支部主催の合同福祉講演会を開催しました。「ひきこもる家族と共に生きていく」と題して、宮崎大学教育学部准教授で、臨床心理士の境　泉洋（さかい　もとひろ）先生に講演をいただきました。

「ひきこもり」の定義は、厚生労働省によると「様々な原因の結果として社会的参加を回避し、原則的には６ヶ月以上にわたっておおむね家庭にとどまり続けている状態を指す現象・概念」となっています。内閣府の近年の調査では、ひきこもり人口は全国で約54万人で、高年齢化が危惧されています。

境先生は、実際にひきこもり状態のお子さんがいる家族の支援に携わった経験もあり、具体的に話していただきました。ひきこもっている本人と親、兄弟姉妹の関係性について、密着か回避か、負い目か僅かな期待か等、家族の心理状態について正に「あるある」と頷いてしまいました。家族支援は効果的であるが難しい一つに家族の葛藤を挙げておられます。「甘やかしてはいけない焦り」と「焦らせてはいけない恐怖」が交錯していると話されました。

そして、「ひきこもり」についての支援プログラムの紹介や家族会・地域コミュニティなどで成果を挙げている事例など紹介いただきました。